

近現代日本人の中国認識に関する 中国側研究のレビュー

—— 日本のメディア資料に基づく中国側の2002–2021年の研究を中心に ——

唐 張 熹

はじめに

目覚ましく発展してきた情報化社会には光があれば影もある。現代の人々は家庭、学校や職場にいながら、国内外の豊富な情報を瞬時に入手できるようになった。新聞やテレビなどのマスメディアに限らず、驚異的に発展してきたSNSの登場によって、外国の情報が一般の人々の周囲に溢れるようになった。しかし、ネット利用の裾野が広がるにつれ、悪意のある使われ方が目立つようになった。日本では、インターネット上における中国、韓国・北朝鮮などの東アジア諸国に対する否定的・侮蔑的な発言も散見される。現在のネットには、「排外主義」「ネット右翼」「歴史修正主義者」などの言論も少なくない（真辺・周、2016）。このようなことから、日本人の中国に対する認識の形成や変遷を研究することは、今後の日中関係を考える際に重要である。

メディアについて、メディア史研究者である有山・竹山（2004）は「人と人のあいだのコミュニケーションを媒介する作用や実体」（有山・竹山、2004、p.7）であると指摘している。近代日本人の中国観を検討した金山は「メディアの表象を検討することが、当時の日本社会一般の観念を検討することと同義である」（金山、2014、p.16）と述べ、各種メディアにおける表象は、送り手側の中国認識のみならず、受け手側の中国認識にも反映すると主張している。また、金山は、近現代の日本社会において共有されている中国観を、メディア資料を通じて実証的に把握することができるとしている（同上）。

2010年代になり、日本側の研究としてメディア史の金山（2014）をはじめ、思想史研究の立場から松本（2011）などが登場しており、日本人の中国観がまとめられている。一方、同時期には中国国内でも日本人の中国観について研究成果が次々と発表されたが、これらの内容はあまり日本側で紹介されていない。本稿では、これを補うため、2002年から2021年までの20年

間にわたり、中国国内で発表された、近現代日本人の中国認識に関する文献を取り上げ、レビューする。この20年を振り返ってみると、インターネットの普及、新聞や雑誌の復刻、史料のデータベース化などにより、史料を入手することが以前より簡単になり、日本のメディアを歴史的に研究することが容易となった。また、中国側において、日本で留学した経験がある研究者数が増加したことや、南開大学日本研究所や中国社会科学院日本研究所などの研究センターの活発な活動の結果により、近現代日本人の中国認識に関する書籍や論文が増えている。

本稿は中国側のCNKI¹（China National Knowledge Infrastructure、中国学術文献オンラインサービス）に掲載されている日本の中国認識に関する論文を抽出し、関連論文の研究動向の検討を試みる。検索範囲は2002年から2021年までのすべての文献とした。CNKIで対象を抽出する際に、「中国観」および「中国認識」の2つのキーワードをもとに主題検索を行った結果、それぞれ合計1238件と5125件となった。この結果の中から日本の中国観、中国認識を手作業で再抽出したところ、関連する文献は合計624件となった。最初の文献は2002年8月まで遡り、最新作は2021年12月に掲載されたものである。これらの収集したデータの基本情報をMicrosoft Excelに入力して重複を排除し、本文が閲覧できないものを除外するデータクリーニング作業²で残った316件の論文を本研究の対象とした。

本稿では第一に、日本の新聞・雑誌を資料とする中国認識の研究、第二に、日本の文学作品を資料とする中国認識の研究、第三に、日本の個人の日記や旅行記を資料とする中国認識の研究に関する文献を整理する。そのうえで本稿では、上記の3点について整理した上で、中国国内における、新たな研究動向について考察することにしたい。

なお、本稿で日本語の作品に言及する場合は、最初に日本の作品名を記し、そのあとに中国語のタイトルを（ ）で補記した。

1. 中国認識に関する研究動向の整理

1. 1 日本の新聞・雑誌を資料とする中国認識に関する研究

復旦大学韓国研究センターに所属した馮（1996）が発表した研究は、新聞の宣伝からみた、近代日本の朝鮮認識と中国認識に関する研究である。これは、中国国内でメディアを資料としての日本の対中認識を扱った初めての本格的な研究とみられる。それ以降、新聞・雑誌を史料とする日本の中国認識に関して活発な議論が相次いだ。

近代以降の日本では、さまざまな新聞が発行されていた。新聞は一般民衆が享受しうるメディアの一つであると同時に、民衆の対外認識形成の役割も担っていた。近代における新聞が当時の中国事情に対して持っていた認識や主張を分析することには重要な意味がある。中野目は、新聞と雑誌に掲載した「記事内容が各時代実像を如実に反映しており、近代・現代史の歴史資料として固有の価値を有することは疑いない」（中野目、1998、p. 322）と強調し、新聞と

雑誌は政治史、思想史と社会史の史料として認知されつつあると述べている。

直接中国観には言及していないが、中国の研究者が行った日本の新聞に関する研究として、徐（2013）がある。徐は、『万朝報』に掲載された当時の子ども向けに描かれた『週日漫画』に注目し、1919年6月29日から1923年6月24日までの4年分の連載を研究対象とした分析を行った。このほか、郭（2014）や鮑（2019）などが、近代日本の新聞を題材に研究成果を発表している。

馬（2010）は現代日本の新聞社をはじめとして、テレビ局などマスコミ各社による歴史教科書問題、中国の食料品安全問題などに関する話題を取り上げ、マスコミ各社の対中認識を検討した。呉（2017）もメディアによって報道された中国観が日中関係に大きな影響を与えると述べている。

張（2010）は近代日本で出版された雑誌による中国認識に注目し、日清戦争後に創刊された雑誌『世界の日本』を史料として、この雑誌の対中認識、対中政策や中国社会に対する認識などについて論じた。秦（2016）は中国文学研究会が刊行した学会機関誌『中国文学月報』を中心に現代日本文学界の中国認識を検討した。馬・邢（2021）は近代日本教育界において影響力のあった雑誌『教育時論』に表れた中国観と戦争観をまとめた。そのほか、李佳鴻（2018）の雑誌『改造』における中国認識の考察、程（2018）の『婦人画報』の中国女性観の検討がある。

馬場・陳（2002）らは、戦後の1945年12月に岩波書店が創刊した雑誌『世界』を史料に、1940年代後半から1990年代にかけて、雑誌『世界』に掲載された中国関連の記事や論説を取り上げ、日本における現代中国像の形成を論じた。馬場・楊（2010）は1945年から1972年までに日本で出版された24種の総合雑誌に掲載された2554件の中国に関する記事を整理し、日本の知識人の対中認識の形成と変化、および中国像の変遷を明らかにした。屈（2008）は日中国交正常化以降に出版された『中央公論』に着目し日本人の中国観を分析した。

1. 2 日本の文学作品における中国認識に関する研究

日本の文学作品を資料とする日本人の中国認識に関する研究に関しては、袁（2004）による「日本侵華文学中的中国形象」をはじめとして、数多くの研究成果が登場した。楊（2013）は長期の中国生活を体験した昭和詩人である草野心平のアジア主義に対する認識の形成や変遷、または作品に反映された中国認識をまとめた。王（2012）、王・尚（2010）らは明治時代以降の日本文学作品における中国認識についてまとめている。日中戦争が勃発した以前において、1930年代の上海を背景にした小説『上海』を取り上げ、作家横光利一の中国観を分析している。邱（2006）は芥川龍之介の作品に着目して彼の文学意識と中国観の変遷を解明し、武（2007）は佐藤春夫の小説『亜細亜の子（亜細亜之子）』の中国観を考究し研究成果をまとめている。

戦後においては、潮・于（2016）は堀田善衛の作品における日本戦後派作家の中国観を検討

した。周（2017）と楊世芳（2015）は村上春樹の小説『中国行きのスロウ・ボート（去中国的
小船）』を中心とする村上の中国観を、張（2016）は村上春樹の作品による中国像と中国観に
関する研究を発表した。

劉（2012）には哲学者の和辻哲郎の作品『風土』に表れた中国認識を批判した研究がある。
これに類似した観点から、鮑・原（2015）には小説『坂の上の雲（坂上云）』の中で、司馬遼
太郎が描いた中国像を批判している。他方、日本文学作品に表象されている中国各地の都市像
に関する研究もある。

1. 3 日本人の個人の日記や旅行記を資料とする中国認識に関する研究

日本の個人の日記や旅行記を資料とする日本人の中国認識に関する研究は、多くの研究成果
がある。単（2008）、占（2013）、谷（2017）などの研究者は、作家芥川龍之介の『支那遊記
（中国遊記）』（改造社、1925）に注目した。張（2011）、連（2012）や佟（2018）は、夏目漱石
の著作『満韓ところどころ（満韓漫遊）（満韓処処）』を題材にして検討した。連・薛（2011）、
金（2014）、馬（2014）と頼（2019）は、新聞記者として知られた徳富蘇峰が書き残した『支
那漫遊記（中国漫遊記）』に反映されている中国認識を整理した。胡（2013）、戴（2017）は内
藤湖南が書いた『燕山楚水：支那漫遊』に注目し、内藤湖南が書き残した旅行記や日記を題材
として中国体験や中国観についての分析を行った。

胡（2017）（2018）や李（2021）らは、明治時代の最も有名な漢文体で書かれた中国旅行記
である山本憲の『燕山楚水紀遊』、岡千仞の『観光紀遊』、竹添進一郎の『棧雲峡雨日記』に着
目にし、それらの著作を資料に旅行記に反映されている中国観に関する論文を発表している。

2. 中国認識に関する研究の新潮流

この20年間におけるメディアにおける中国認識の研究では、これまでと異なるいくつかの傾向
が読み取れる。以下、新たな動向について、「戦争と日本の中国認識の関係性」「映像の中に表
象される日本の中国認識」「実際の体験・見聞に基づく中国認識」「その他」という4つの観点
から分析したい。

2. 1 戦争と日本の中国認識の関係性

この20年の間に電子データ化された新聞・雑誌などの活字史料のほか、アジア歴史資料セン
ター、国立公文書館デジタルアーカイブや日本外交文書デジタルコレクションなどの公文書の
インターネット公開が進んだ。これにより、中国認識研究の新たな潮流として、日清戦争や日
中戦争と対中認識の関係性に関する研究が増加している。これについて楊（2012）は、中国亡
国観はあらゆる経路から日本の対中政策及び戦略に浸透し、決定的な観点となり、最終的に日

本の対中戦争の勃発に繋がったと指摘し、中国認識の研究は日中戦争との関連性という新たなステージに入ったことを告げた。

楊・王（2015）の『近代以来日本対華認知及其行動選択研究』、王（2021）の『日本対中国的認知演変：从甲午戦争到九一八事变』で著者らは実証主義と比較歴史学のほか、国際政治学や認知心理学などの概念も駆使している。王は数多くの日本語雑誌や新聞などの史料と当時の政府関係文書を使い、近代以来の日本の中国観の形成や変遷を分析し、日中戦争の勃発と日本の対中認識との関連性を指摘している。王潤澤・王魯亜（2017a）のイエロー・ジャーナリズム³に関する研究では、19世紀末の日本を代表するイエロー・ジャーナリズムである『万朝報』と『二六新報』を取り上げ、時代背景、『万朝報』と『二六新報』の編集面での特徴、イエロー・ジャーナリズムの中にある日本の新聞社の報道体制やニュース観といった角度から、日本の新聞における民衆動員の機能を明らかにしている。また、同研究では、新聞における民衆を扇動する機能はその後の日中戦争、太平洋戦争時における民衆の動員にも影響を与えたことにも言及している。また、王潤澤・王魯亜（2017b）の日本近代新聞の大衆化に関する研究では、明治中後期から大正初期までに、イエロー・ジャーナリズムの流行、白虹事件や『朝日新聞』の企業化から、『万朝報』は日本新聞の大衆化が進んだ中で重要な役割を果たした側面があったとしている。そして、王は当時大衆化が進んでいた各新聞は知識人層から民衆層に滲透し、下層階級にも読者を開拓することに成功したため、戦争動員において大きな役割を果たしたことを明らかにしている。

新聞記者の対中認識を考察した論考もある。最新の研究で、安（2022）は、政治動員という視点に基づき、新聞社の1931年以前の世論、戦場報道と国内支援の呼びかけという3つの側面から、日清戦争以前における『東京日日新聞』、『東京曙新聞』、『評論新聞』などの新聞の宣伝と動員を整理した。そして、戦争中に発行された『東京日日新聞』、『国民新聞』、『毎日新聞』、『大阪毎日新聞』などの新聞を取り上げ、各新聞社が多くの新聞記者を戦場に派遣して現地の状況を報道し、日本国内の支援を呼びかけたことを明らかにした。また、福沢諭吉、中江兆民、徳富蘇峰と石橋湛山など当時の代表的な新聞記者を取り上げ、彼らの言論と思想を分析した。

2. 2 映像の中に表象される日本の中国認識

映画・ドキュメンタリーからみた中国認識の研究は、近年の新たな潮流として流行している。鄭（2017）は、『スワロウテイル』（岩井俊二監督、1996年）、『スマグラーおまへの未来を運べ』（石井克人監督、2011年）などの映画における中国的要素の日本社会に対する影響を考察した。そして、『雲のように風のように』（烏海永行監督、1991年）、『敦煌』（佐藤純彌監督、1989年）、『平清盛』（NHK大河ドラマ、2012年）などの歴史映画を取り上げ、戦後日本映画における中国像の構築を分析している。鄒（2020a）は、三池崇史の映画『中国の鳥人』に注

目し、中国にいた日本人の目から見た中国の都市現況、社会の闇などの実態についての検討を試みている。また、鄒（2020b）は、平成に入り、卓球に関連する映画が増えているため、日本における卓球の意義や印象の構築などの芸術方法を通して、卓球をめぐる中国像の再構築を分析している。

一方、ドキュメンタリーの中国認識に関する論議は、韋ほか（2019）が「中国形象研究在中国——“中国形象”研究論文の主題元分析（2000-2018）」において政治、経済などの視点から、日本や欧米諸国のドキュメンタリーに基づき、量的・質的研究方法を使って研究を行った。劉（2016）や孔（2019）も日本をはじめ、海外のドキュメンタリーによる中国像の認識と構築を論じている。武・呉（2021）は、日本人監督である竹内亮が撮影したコロナ感染症に関するドキュメンタリーを取り上げ、コロナ感染症が蔓延していた中国の武漢市、南京市を舞台として、都市に住んでいる人々、または医療者たちの実態を考察した。

他方、NHKが撮影した中国に関するドキュメンタリーにおける中国認識の研究がある。趙（2009）は、『中国鉄道大紀行』（2007年）『激流中国』（2007年）などの映像作品に注目し、NHKからみた中国の風景や社会問題を考察した。李昕婕（2018）は、『ワーキングプア（貧忙族）』（NHKスペシャル、2006年）と『激流中国』といった2つのドキュメンタリーを比較しながら、日中両国の社会問題を論じた。呉・湯（2019）の論文では、1953年から2012年までにNHKが撮影した中国に関するドキュメンタリーは合計で約1800本あると述べ、その中で中国下層社会にかかわる作品を15本取り上げている。その論考では、出稼ぎの都市生活や農村教師の職場状況などNHKが考察した中国の現状を示した。また、魏・饒（2019）は、国際時事ドキュメンタリー「ドキュメンタリー WAVE」を取り上げ、NHKの対中報道における中国認識を検討した。

そのほか、ネットにおける日本の中国認識を考察したものもある。唐（2011）は、Yahooの口コミ欄から中国認識のデータを収集し、量的分析でネット上における日本の中国観を考察した。

2. 3 実際の体験・見聞に基づく中国認識

そのほか新しい研究動向として、メディアに表れた中国認識だけでなく、実際に旅行や調査、公務などで中国を訪れた日本人の記録から中国認識を論じるという、視座の転換も現れている。文学作品については、前述したが、文学者以外にも対象が広がっているのが新しい動向である。例えば、楊洪俊（2015）は①政治、軍事を目的にして中国調査を行った高橋謙の『支那時事』（1894年）、徳富蘇峰の『支那漫遊記』（1918年）、『七十八日遊記』（1906年）、②観光を目的とする内藤湖南の『支那漫遊：燕山楚水』（1900年）、佐藤善次郎の『南清紀行』（1911年）、③商業と実業視察を目的とする満韓観光団の『満韓観光団志』（1911年）と白石重太郎『赴清実業団志』（1914年）、④布教活動を目的とする西本願寺の『清国巡遊志』という4種類

の史料を利用しながら、明治時代における訪中した日本人の体験を整理し、当時の南京に対する認識、または南京の交通状況、商販実態や町風景などを解明した。徐（2013）による岸田吟香の『呉淞日記』で書かれた清末上海の飲食、衣服と都市構造などの側面から、旧上海の実態に関する紹介もある。また、常（2009）、焦（2022）は与謝野晶子の『満蒙遊記』、薛（2016）は高杉晋作の『遊清五録』を取り上げ、満州地方や上海などの中国地域に対する高杉認識について論じた。一方、南部地域のみならず、中国北方地方への注目もあり、曲（2021）や徐（2021）による山東省や東北地域に関する認識の研究も相次いだ。

このような動向に影響を与えたと考えられるのが、ゆまに書房が1988、1989年に出版した『明治北方調査探検記集成』や1997年の復刻版『幕末明治中国見聞録集成』と、特に愛知大学による東亜同文書院に関する一連の研究である。東亜同文書院の「大旅行」に関連する膨大な記録である『東亜同文書院大旅行誌』シリーズは、戦前の日本人の中国体験に関する貴重な史料である。馮（2016）は東亜同文書院の調査資料である「東亜同文書院中国調査手稿」を整理するなど、研究資料の整理と刊行に大きな役割を果たした。この史料が刊行されたことによって、近代日本の中国認識研究の具体化や地域化が進みつつある。易（2021）は東亜同文書院が記録した『大旅行誌』を活用し、1907年から1943年にかけて、近代湖南省の経済や社会変遷について論じている。于（2021）は経済の視点から京杭大運河沿線における各地の物産、水運、商業などについて整理している。寇（2019）は山東省にある泰山の社会風土、実態や認識を考察している。

2. 4 その他

その他、個別の外交文書、教科書などの資料に基づく研究についても注目すべき成果が現れている。古代日本について、朱（2009）は『善隣国宝記』を利用し、室町時代における日本知識人の中国観を研究している。日中戦争期については、崔（1989）が『帝国国防方針』の対中認識の研究を行い、解（2003）は満鉄経済調査会の「特別調査」と「個人調査」の調査資料を使い、北部の河北省から江南地域にある無錫市まで、当時の中国の都市と農村の実態に対する認識を論じている。

また、日本の教科書についての研究も進んだ。譚（2014）の日本の教科書に基づく中国像に関する研究書『日本教科書の中国形象研究』の登場により、日本の教科書における中国認識の研究は一層深まったといえよう。張・徐（2015）は明治末期の小学校教科書における中国像を検討した。現代教科書の議論に関しては、王ほか（2016）の「跨文化形象学視闕下日本教科書中的中国形象——以端午、中秋、新年三大伝統節日為考察対象」、張・陸（2019）の「日本歴史教科書中的古代中国形象」と沈（2019）の「現行日本中学歴史教科書中的“中国形象”」も教科書を史料として取り上げている。一方、王・周（2018）には日本経済界の視点から『通商白書』を通じた対中認識の変遷に関する論考もある。

おわりに

以上、2002年から2021年までの間に中国国内の研究者が考察した日本の中国認識に関連する文献を整理して紹介してきた。

本論文は、第一に、日本の新聞・雑誌を資料とする中国認識の研究、第二に、日本の文学作品を資料とする中国認識の研究、第三に、日本の個人の日記や旅行記を資料とする中国認識を検討している。また、「戦争と中国認識の関係性」「映像による中国認識」「実際の見聞に基づいた認識」という3点について関連する文献を整理し、新たな研究潮流として考察した。この20年間、中国において日本の中国認識に関する研究が大幅に増えている。これはとりもなおさず、この20年間中国において「外国の対中認識」に関する研究が大きく飛躍した何よりの証左であろう。

特に近代日本の対中認識に関する研究の増加が顕著である。近代日本の対外認識について、穎原（1994）は、日本の対外観を分析することが近代日本の対外態度を解明する上で重要な作業であると主張している。片山（2009）は、過去の新聞論調に見られる外国への姿勢を読み解くことにより、現在日本の外国認識を豊かにすることができると指摘している。1892年に創刊された『万朝報』は一般の民衆を対象にした新聞として、職人・小商人などの都市中下層を開拓することに成功した。明治末期から大正初年にかけての『万朝報』の全盛期において、民衆新聞が当時の中国に対して持っていた認識や主張を分析することには重要な意味を持つ。『万朝報』を素材とした日本の対中認識に関する研究はまれである。『万朝報』で表象されている中国認識を検討することを通じて、明治末期から大正初期にかけての日本民衆の中国観がいかんにして形成されていったのかを実証的に示すことができると考える。今後は本稿で整理した研究動向がどのように展開していくのか、また、これまでとは異なる方向で新たな研究潮流が生まれてくるのか、引き続き注視していきたい。

【注】

- 1 CNKI は1984年から公開された中国の文献データベースである。CNKI では学術雑誌、重要新聞、博士・修士学位論文、重要学術会議論文、外国語文献、統計データなどの各種データベースが収録されている。リジュンソ「中国の学術雑誌から見る「家庭暴力」と被害者像—CNKI の文献分析に基づいて—」『人間文化創成科学論叢 第22巻』（2019年、183-192頁）を参考にした。
- 2 データクリーニングとは重複する文献、内訳が閲覧できない文献を除外すること。前掲リジュンソ（191頁）を参考にした。
- 3 イエロー・ジャーナリズムとは、新聞が扇情的な記事などを使って読者の関心をひき発行部数を伸ばそうとする行為。1890年代にアメリカのニューヨークで、ピューリッツァー系の『ワールド』紙とハースト系の『ジャーナル』紙が演じた激しい部数拡張競争を表すことばとして用いられた。『ワールド』は当時すでに、派手な色使い、きわもの的な記事、政治や社会の不正糾弾などで成功を収めていた。『ジャーナル』はこれに対抗するため、同様の紙面構成をとる一方、『ワールド』で人気漫

画が「イエロー・キッド」を連載していた漫画家を引き抜いた。『ワールド』は新しい漫画家を雇って連載を継続、この両紙のつばぜり合いが、イエロー・ジャーナリズムということばを生んだ。この争いは両紙の発行部数を飛躍的に増大させ、全米のジャーナリズムに影響を与えたが、20世紀に入ると下火となった。日本でも戦後の一時期隆盛した。イエロー・ジャーナリズムの手法は、全面抜きの大見出しやカラー漫画、イラストの掲載といったかたちで今日まで使われ続け、テレビやインターネットでは一般的なものになっている（『ブリタニカ国際大百科事典』を参照・引用）。

【参考文献】

〈和文文献〉

- 愛知大学（2006）『東亜同文書院大旅行誌』雄松堂出版。
有山輝雄・竹山昭子編（2004）『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社。
穎原善徳（1994）「日清戦争期日本の対外観」『歴史学研究』663号，17。
片山慶隆（2009）『日露戦争と新聞—「世界の中の日本」をどう論じたか—』講談社。
金山泰志（2014）『明治期日本における民衆の中国観：教科書・雑誌・地方新聞・講談・演劇に注目して』芙蓉書房出版。
中野目徹「新聞・雑誌（日本の）」、尾形勇ほか編（1998）『歴史学事典（第六巻）』弘文堂所収，312-323。
松本三之介（2011）『近代日本の中国認識：徳川期儒学から東亜協同体論まで』以文社。

〈中文文献〉

- 安平（2022）『近代日本報界の政治動員（1868-1945）』广西師範大学出版社。
鮑立娟（2019）『《大陸報》頭版中国報道研究（1911-1916）』[修士論文，上海大学]。
鮑同・原焯珂（2015）「司馬遼太郎的“中国観”批判——以《坂上云》為中心」『日語学習与研究』06，95-101。
常驕陽（2009）「近代日本作家的“満州”游記述評」『日本研究』01，93-96。
潮洛蒙・于秀智（2016）「試論日本戦后派作家的中国認識——以堀田善衛為例」『牡丹江大学学报』25(12)，50-52。
程茜茜（2018）『从《婦人画報》看日本近代的中国女性観』[修士論文，浙江工商大学]。
崔丕（1989）「日本《帝国国防方針》的中国観」『東北師大学報』01，56-61。
戴玉金（2017）「内藤湖南中国認識的构建——以第一次中国考察前后為比較对象」『福建江夏学院学报』7(06)，81-86。
馮天瑜（2016）『東亜同文書院中国調査手稿叢刊：総目、索引、附録』国家図書館出版社。
馮瑋（1996）「從新聞媒体的宣传看近代日本对朝鮮的認識和政策的演变——兼論对中国的認識」『韓国研究論叢』第2輯，356-379。
谷惠萍（2017）「旅游者視角下的芥川龍之介中国行」『名作欣賞』33，20-21、25。
郭海燕（2014）「有关甲午战争宣戰前日本報刊对中国報道的研究——以《朝日新聞》報道李鴻章及清軍動向」『社会科学戰線』10，103-111。
胡天舒（2013）「内藤湖南的中国観——以《燕山楚水》為中心」『歷史教学（下半月刊）』11，47-52。
胡天舒（2017）「山本憲的中国観——以《燕山楚水紀游》為中心」『外国問題研究』02，51-57、118。
胡天舒（2018）「岡千仞的中国観——以《觀光紀游》為中心」『歷史教学問題』01，78-83、140。
焦健（2022）「《滿蒙游記》笔下的矛盾中国観」『文学教育（下）』06，158-160。
孔朝蓬（2019）「外国影視記錄片对“中国形象”的文化認知与建构研究」『当代電影』02，84-88。

- 寇淑婷 (2019) 「日本東亞同文書院大旅行記中的“泰山”」『泰山學院學報』41(06), 54-58.
- 賴雅瓊 (2019) 「日本右翼記者德富蘇峰的中国認識——以《中国漫遊記》為對象」『人文論叢』31(01), 312-321.
- 連永平 (2012) 「从《滿韓漫遊》看夏日漱石的中国認識」『語文學刊』23, 31-32.
- 連永平·薛秋昌 (2011) 「从《七十八日遊記》看德富蘇峰的中国認識」『社會科學論壇』08, 71-77.
- 李佳鴻 (2018) 『关于雜誌《改造》的中国認識的探討」[修士論文, 廣東外語外貿大學].
- 李姍姍 (2021) 「《棧云峽雨日記》的晚清中国形象」『今古文創』32, 43-44.
- 李昕婕 (2018) 「浅析日本 NHK 記錄片的創作風格——以《窮忙族》系列和《激流中国》系列為例」『視聽』11, 48-49.
- 劉超 (2012) 「《風土》与和辻哲郎片面的中国認識」『群文天地』17, 175、177.
- 劉忠波 (2016) 「中国形象的域外生成——以国外影展中的中国民間記錄片為例」『南京師範大學文學院學報』01, 140-144.
- 馬步云·邢永鳳 (2021) 「日本教育界眼中的甲午戰爭与晚清中国——以《教育時論》雜誌為中心 (1894-1895)」『東北亞外語研究』9(04), 90-96.
- 馬場公彦·陳都偉 (2002) 「戰後日本論壇的中国觀變遷——从《世界》雜誌的相关報道中所看到的」『開放時代』05, 66-79.
- 馬場公彦·楊星 (2010) 「日本綜合雜誌上反映的中国形象 (1945-1972)」『南開日本研究』00, 286-301.
- 馬興芹 (2014) 「从《中国漫遊記》看德富蘇峰的中国認識」『現代語文 (學術綜合版)』03, 79-81.
- 馬新明 (2010) 『日本媒体涉華報道同質現象研究」[博士論文, 中国社会科学院研究生院].
- 金成花 (2014) 「从《中国漫遊記》看德富蘇峰的東北認識」『通化師範學院學報』35(09), 77-80.
- 秦梨麗 (2016) 「从《中国文学月報》看日本学者的中国文学認識——以漢学研究為例」『运城學院學報』34(05), 73-76.
- 邱雅芬 (2006) 「“湖南的扇子”：芥川龍之介文学意識及其中国觀之變遷」『外国文学研究』04, 135-141.
- 屈彩云 (2008) 「从《中央公論》看中日邦交正常化前后日本人的中国觀」『中共山西省委黨校學報』01, 118-120.
- 曲曉燕 (2021) 「近代日本人遊記中的山東認識 (1871-1931)」[博士論文, 山東師範大學].
- 单援朝 (2008) 「《中国遊記》与芥川認識」『日本學論壇』02, 24-29.
- 沈紅萍 (2019) 「現行日本中學歷史教科書中的“中国形象”」『歷史教學問題』03, 159-164.
- 宋波·張璋 (2020) 「日本文学中的中国都市形象研究述評」『江南大學學報 (人文社會科學版)』19(02), 91-96.
- 唐思蜀 (2011) 「从日本網民回帖看中国形象」『重慶三峽學院學報』27(05), 92-94.
- 譚建川 (2014) 『日本教科書的中国形象研究』北京大學出版社出版.
- 佟若瑤 (2018) 「从《滿韓漫遊》“苦力”形象轉變看夏日漱石的中国觀」『文學教育 (上)』05, 45-47.
- 王美平 (2021) 『日本对中国的認識演變：从甲午戰爭到九一八事變』社會科學文獻出版社.
- 王秋菊ほか (2016) 「跨文化形象學視阈下日本教科書中的中国形——以端午, 中秋, 新年三大傳統節日為考察對象」『東北亞外語研究』4(03), 86-90.
- 王潤沢·王露亜 (2017a) 「日本黃色新聞潮与報業煽動機制」『現代轉播』39 (09), 39-43.
- 王潤沢·王魯亜 (2017b) 「“知識階層的精神伴侶”到“民众生活的必需品”——以社會動員為角度考察日本近代報紙的大眾化」『遼寧大學學報 (哲學社會科學版)』45(06), 1-10.
- 王天慧 (2012) 「《上海》与橫光利一的中国觀」『東北師大學報 (哲學社會科學版)』04, 129-132.
- 王天慧·尚俠 (2010) 「橫光利一的中国認識与文本依据——以長篇小說《上海》為中心」『東北師大學報

- (哲学社会科学版)』05, 128-131.
- 王勇麗・周維宏 (2018) 「从日本《通商白皮書》看日本經濟界对華認識的變遷」『東北亞經濟研究』05, 100-111.
- 韋路ほか (2019) 「中国形象研究在中国——“中国形象”研究論文的主題元分析 (2000-2018)」『未来伝播』26(02), 46-60、137-138.
- 魏然・饒虹宇 (2019) 「NHK 國際時事類記錄片《DOCUMENTARY WAVE》選擇性涉華報道中的中国形象」『東南伝播』11, 70-72.
- 吳紅雨・湯銀峰 (2019) 「記錄影像回流与公共輿論——以 NHK 鏡頭中的中国底層画像為例」『徐州工程學院學報 (社会科学版)』34(06), 76-87.
- 武繼平 (2007) 「佐藤春夫の中国觀論考」『浙江學刊』05, 88-92.
- 吳啓 (2017) 『2006-2016年日本報紙中国觀对中日关系的影响研究』[修士論文, 四川外國語大學].
- 武新宏・吳保平 (2021) 「後疫情時代記錄片“他塑”中国形象——以日本導演竹内亮中国疫情題材記錄片為例」『電影新作』04, 83-87.
- 解學詩 (2003) 「日本对戰時中国的認識——滿鉄の若干对華調查及其觀點」『近代史研究』04, 89-112、7.
- 薛晨 (2016) 「从《游清五録》看近代日本人眼中的中国形象」『青年文学家』08, 56-57、59.
- 徐靜波 (2013) 「《吳淞日記》与近代日本人的中国認識」『外國問題研究』(04), 15-23.
- 徐蕊 (2021) 「民国初年日本人見聞録中的東北形象及東北認識」[修士論文, 遼寧大學].
- 徐園 (2013) 「日本早期兒童漫画中的動物擬人化表現」『日本研究』02, 105-111.
- 楊棟梁 (2012) 『近代以来日本の中国觀』江蘇人民出版社.
- 楊棟梁・王美平 (2015) 『近代以来日本对華認識及其行動選擇研究』經濟科學出版社.
- 楊洪俊 (2015) 「日本明治游記中的清末南京」『江蘇社会科学』01, 233-240.
- 楊世芳 (2015) 「从情節設置看村上春樹的中国觀——以《去中国的小船》為主」『劍南文学』, 42-43.
- 楊偉 (2013) 「昭和歷史語境中的草野心平与中国——以其中国体验和亞洲意識的變遷為中心」『国外文学』33 (04), 53-62.
- 易丙蘭 (2021) 「東亞同文書院在近代湖南的情報調查活動探析」『湘南學院學報』43 (03), 49-55.
- 游長冬 (2021) 「跨媒介視域下的上海想象与中日关系流变——从《上海游記》到《異鄉人：上海的芥川龍之介》」『当代電影』04, 117-119.
- 袁盛財 (2004) 「日本侵華文学中的中国形象」『新余高專學報』03, 44-46.
- 于振冲 (2021) 「東亞同文書院京杭大运河調查初探」『日本研究』04, 89-96.
- 占才成 (2013) 「芥川龍之介《中国游記》的中国觀」『牡丹江教育學院學報』01, 12-13.
- 張利民 (2016) 「村上春樹小說作品中的中国形象与中国觀研究評述」『湖南科技学院學報』37(11), 38-39、46.
- 張羽 (2011) 「从《滿韓地處》看漱石的中国觀」『安徽文学 (下半年)』10, 105-106.
- 張煜・陸敏蔚 (2019) 「日本歷史教科書中的古代中国形象——以遣唐使、鑒真東渡和日宋貿易為例」『漢字文化』11, 77-78.
- 張智慧 (2010) 「19世紀末日本的中国認識探析——以《世界之日本》雜誌為中心」『上海大學學報 (社会科学版)』17(02), 133-144.
- 張卓識・徐冰 (2015) 「論明治末期 (1903-1912) 日本小学教科書中的中国形象」『山東社会科学』07, 94-98.
- 趙新利 (2009) 「日本記錄片中的中国形象」『青年記者』28, 15-17.
- 真辺将之・周曉霞 (2016) 「日本近代史研究的動向与若干問題」『南開日本研究』185-197.

- 鄭煬 (2017) 「戰後日本電影的中国形象建构」『上海大学学报 (社会科学版)』34(04), 43-51.
- 周曉晨 (2017) 「浅析《去中国的小船》中村上春樹的中国觀」『名作欣賞』02, 139-141.
- 朱莉麗 (2009) 「試析室町時代五山禪僧的中国觀——以《善隣国宝記》所收外交文書為中心」『社会科学輯刊』06, 162-168.
- 鄒茜 (2020a) 「日本平成電影的跨境想象与詩意的中国形象——以三池崇史《中国鳥人》為中心」『歌海』06, 53-56.
- 鄒茜 (2020b) 「日本電影中的“乒乓球”意象与中国形象」『今古文創』20, 60-62.

(唐 張熹：城西國際大学大学院人文科学研究科博士課程比較文化專攻在籍)

Abstracts

Chinese Study on Japanese Perceptions of China: Focusing on Papers Published during 2002 to 2021 in the Chinese Database *CNKI*

Tang Zhangxi

This paper aims to analyze papers on Japanese perceptions of China published in China during the last 20 years, from 2002 to 2021, in the *China National Knowledge Infrastructure* database (*CNKI* database). This study consists of three parts as follows: (1) study on Japanese perception of China using newspapers and magazines as sources; (2) study on Japanese perception of China based on literary works; (3) study on Japanese perception of China using personal diaries and travel journals as sources.

This paper organizes the literature on “the relationship between the War and Japanese perceptions of China”, “Japanese perceptions of China through images”, and “Japanese perceptions of various regions of China”, and review the new trend of Chinese study on Japanese perceptions of China.